

ミステリ読書案内

2020. 8. 15 発行元

第131号 伊藤 剛

<https://mystery-dokuan.com>

森村誠一ベスト表

全作品を読み終えてから『ベスト表』を作ろうと考えていたのだが、まだまだ未読の本が残っている。この辺であきらめて、森村誠一の一回目の『ベスト表』を載せて、作品について少し紹介しようと思う。

森村誠一という作家…

森村誠一は1933年生まれで、今年87歳。作品を書き続けている現役の作家。大学を卒業後ホテル勤めをしたことが有名。多くの作品にホテルが登場するのはそのため。

途中にいくつかの作品があるようだが、1969年に『高層の死角』が江戸川乱歩賞を受賞し、大作家としての道を歩み始めた。翌1970年の『新幹線殺人事件』がベストセラーになった。1973年の『腐蝕の構造』で推理作家協会賞。

ミステリだけでなく、歴史小説も書き、戦争関連のドキュメンタリーなどもたくさん手掛けている。ミステリに関して言えば、300冊以上の著作がある。

社会派推理小説としての一面も

前の号にも書いたが、私にとっては角川の『人間の証明』の宣伝のイメージが強くて、当時積極的に読みたいと思うミステリではなかった。「社会派」という分類は悪くないのだけれども、人間の“悪”の部分のことさら強調した印象を受けてしまうのだ。

ということで、若いころはほとんど読まなかった。現在は200冊以

上読破したが、それはここ10年くらいのこと。歳を取ると、「何でも受け入れてみよう」という気持ちができるようになる。

右に「ベスト表」を組んでみた。やはり、どうしても初期の作品が上位に位置する。中期の上下巻に分かれた大作の数々も、力強さは感じるものの、デビュー当時の新鮮さを上回るものではない。

メインキャラクターの棟居(むねすえ)刑事の登場する作品は安定したレベルである。

作品数が多いため、似たような設定、似たような展開、似たような解決も多くて、後期に入ると「あれっ!どこかで読んだぞ」という気持ちになることも多かった。

短編の多い作家なのだが…

ミステリ雑誌全盛の時代の作家なので短編作品も多いのが特徴。でも、短編集として「これが代表作」という本は思い浮かばない。斬新なトリックとか、ハッと驚くどんでん返しの結末とかが少ないためだとも思う。ストーリーの流れに沿って、人間関係を中心にした展開の面白さを味わうのが、森村ミステリの本質なのかなと思ったりする。「生き方」みたいなもの。

《森村誠一のベスト表》

1. 高層の死角
2. 野性の証明
3. 人間の証明
4. 新幹線殺人事件
5. 虚構の空路
6. 棟居刑事の復讐
7. 東京空港殺人事件
8. 人間の証明 21st Century
9. 日本アルプス殺人事件
10. 超高層ホテル殺人事件
11. 腐蝕の構造
12. エンドレスピーク
13. 新・新幹線殺人事件
14. 名誉の条件
15. 恐怖の骨格
16. 花の骸
17. 白の十字架
18. 銀河鉄道殺人事件
19. 棟居刑事の黙示録
20. 密閉山脈
21. 棟居刑事の情熱
22. 棟居刑事の一千万人の完全犯罪
23. 暗黒流砂
24. 駅
25. 異型の白昼
26. 壁の目
27. 流星の降る町
28. 闇の掟 明日なき者への供花
29. 終着駅
30. 養生の証明
31. 黒い墜落機
32. 勇者の証明
33. 棟居刑事の純白の証明
34. 致死連盟
35. 誘鬼燈
36. 南十字星の誓い
37. 青春の守護者
38. 炎の条件
39. 密閉城下
40. 祈りの証明 3.11の奇跡

ミステリに限った時、私が読んでいるのは250冊。未読がまだあと60冊以上ある。全著作400冊以上なのだが、短編集に関しては、各出版社で独自の傑作選の形で組んでいるため、ダブリが多い。私も読んでいて混乱する。

社会派推理小説…「社会派」というジャンル分けは非常に幅広く使われているもので、年代や作家の範囲はかなり曖昧である。日本のミステリでは、1958年の松本清張『点と線』『目の壁』以降の流れを指すことが多い。その後1961年の水上勉『海の牙』、そして黒岩重吾、有馬頼義などの名前も挙げられる。1970年代に入って、西村京太郎や森村誠一の初期作品も「社会派」の名前を冠せられることがあるが、私は西村京太郎の土台を「社会派」だとは思っていない。森村作品の多くは「社会派」に分類してもいいだろうなあと考えている。